江戸野菜「亀戸大根」の復活にかける地元商店街

大　城　芳　彦

「雨に浮かんで思い出す　むかし亀島いま亀戸」と御当地ソングで唄われているように、現在の亀戸は、数千年前は江戸湾の浅瀬に浮かぶ亀の子型の島だったそうです。

その亀戸で、いま地元商店街の若い経営者グループの発案により、亀戸大根の復活劇がいろいろな手法で取り組まれているので紹介しましょう。

最近の深刻な不況を乗り越えて何とか商店街に活況を取り戻そうと、若手経営主の有志がグループ「亀の会」（代表　田中繁雄）を結成し、郷土で生まれ育った亀戸大根を主役に、街おこしをはかろうというユニークな案が衆議一決されたのは昨年４月で、それ以来着々と実行に移されているのです。

大根で街おこしとはいささか奇異に感じますが、実は、そのきっかけとなったのは、９９年度にＪＡ東京グループが創立５０周年記念事業として、江戸、東京育ちの野菜の説明板を夫々ゆかりの地域の神社境内に建てて、広く世間に紹介する事業を始めたことにあります。亀戸大根の場合は、１昨年秋にこの香取神社に説明板が建てられて以来亀の会でもその存在が改めて見直され、今回の街おこしにつながって行ったわけです。

亀戸大根の収穫祭と福分けまつりが大盛況

まつりは今年の３月２０日、春分の日に地元香取神社の境内で催されました。まつりに先立って、社殿で亀戸大根収穫祭の儀式が香取宮司の修祓で行われ、大勢の来賓や商工会、神社、学校関係者に加えて、ＪＡ東京グループからも中央会、ＪＡ葛飾及び生産者の鈴木藤一さん等が列席し、初回にしては大変な盛会になり

ました。式のメインである亀戸大根は、小学校の課外活動で作られたもの３把が神前に供えられ、参列者と共にお払いを受けて、収穫の喜びと感謝が捧げられました。

亀戸の土地から大根栽培が途絶えて数十年以上たつたいま、小学校の庭に再び生え育ち収穫された大根を目の当たりにして、よくぞこの土地に大根が帰ってきてくれたという喜びと感動に会場内は包まれたまま、約一時間にわたる収穫祭を終えました。

続いて行われた福分けまつりでは、すでに千名以上の善男善女が境内に溢れるように並び、無料で配られる大根を貰って大喜びしていました。

亀戸大根は以前は「お多福大根」とも呼ばれていたことにちなんで、福をお分けし福がさずかりますようにと、亀の会の願いを込めてこの福分けまつりを始めたそうで、この辺にも下町人情の暖かい発想がうかがえます。

大根作りで小学校の情操教育

亀の会では、郷土の特産野菜であった大根を、この際学校の生徒の皆さんにも作ってもらうことによって、自然や郷土への愛着心が育ってくれればということで、地元の小中学校に話を持ち込んだところ、７校が賛成されてこの大根の試作が実現しました。

作り方が分からない先生方は、葛飾区の生産者である鈴木藤一さんに、種のまき方から収穫まで何度も教わって育てたそうです。その努力が実ってこの収穫祭に立派な大根が奉納されたわけですが、一部によく育たなかった学校もあったようです。なにしろ初めてのことですから、いろいろ苦労話しにはこと欠かなかったようです。土質が合わなかったり、病気や害虫の被害、水不足で乾燥の害が出たりする一方で、すくすく伸びる大根もあり、植物を育てる喜びと難しさが子供達にも直接分かってもらえたのではないかと、担当の先生方も満足そうに話され

ていました。

大根碑と深川鍋

香取神社境内でＪＡ東京グループが建てた亀戸大根の説明板の隣に、大根を型取った大きな石碑が昨年１２月に建てられました。この碑は、神社の近くに古くからある「升本」という割烹料理店主が神社に寄進したもので、この店の名物料理となっている「深川鍋」に由来しています。

この鍋は、アサリのむき身とうどんを入れて、味噌味で煮立てて味わう一方、大根葉めしにアサリのだし汁をかけて食べるシンプルなものですが、亀戸大根の朝漬けがよく合い、あっさりした下町らしい風味が多くの人から好まれています。このため店主にとって亀戸大根はなくてはならない大切な食材であることから、大根へのなみなみならぬ愛着心と、郷土の産物を広く顕彰したいという一念でこの大根碑を建立したそうで、いま地元の話題となっており、街おこしの一環ともなっています。

また、この店では大根を一年中必要なわけですが、亀戸大根の収穫期は従来３～５月の端境期に限られています。これを何とか７月まで収穫できるようにならないものかと、いま店主とＪＡ中央会側とで検討中ですが、日長によるとう立ちの関係がはっきりしないため、実際のほ場で試作を予定しているところです。

古くて新しい江戸野菜

江戸から東京へとつづく東京農業の歴史をたどると、至るところにゆかりの農産物があります。

亀戸の場合は古くから当地の名前がついた大根がたまたまありました。そしてすでに世間から忘れ去られようとしていたとき、ＪＡ東京グループの説明板設置

事業がきっかけとなり、地元商工会の若手有志の皆さんが、この大根一本の可能性を信じて、学童教育を始め広く地域おこしにまで発展させようとしている努力は、いま高く評価されてよいと思います。

古きよきものを見直して、新しきよきものを産み出していくには、こうした視点が大切なことと、郷土への熱き思いが人を動かすことを実感させられました。

そして、これが単なるレトロ野菜の復活ということではなく、そこの地域に特産野菜が定着するに至までの人、文、科学の係わりあい、或いはそうした時代的流れを生き残ってきた役割の重要性を、もう一度改めて見直すことによって、各地に様々な動きが胎動して来るのではないでしょうか。

江戸、東京育ちの野菜たちは、その時の出番をじっと待っているよと、現代の私たちに問い掛けているような気がする。